

湯原温泉の湯の魅力

湯原温泉の定義

自然噴出であること

日本は、温泉天国と思われています。しかしその実態は、近年の最新技術による掘削（ボーリング）に頼った温泉がほとんどであり、湯原温泉のように自然噴出の温泉だけを利用している温泉地は非常に希な状態になっています。掘削温泉は石油と同じで本来、地中深く埋まっていた物を地表に汲み上げるのですから、その成分によっては環境を変化させる物質を汲み出している場合もあります。またいずれ枯れることとなります。一方、湯原温泉のように自噴している温泉は、自然のサイクルの中で絶え間なく生み出されており本来、自然の営みの一部なのです。森林に降った雨が長い年月を経て地下に浸透しマグマで暖められ地上に流れ出る—これは余程の天変地異か、森林の伐採などで山が荒れない限り枯れることはありません。湯原温泉の温泉の定義として大前提は、この自然噴出であることです。これは、湯原で生まれ育ち温泉に日々携わっている住民としての感覚であり、皆さんが普通に温泉のイメージとして思っているモノではないでしょうか？

体温以上の温度があること

温泉というくらいだから温かくなければ温泉とは思えません。温泉法だと25℃以上となっていますが体温以下では身体が温まらない。それ以下でも夏の行水には使えるでしょうが、年中入れるからこそ温泉としてのありがたみがあると思うのです。

十分な湯量が低コストで利用できること

いくら温度が高くても湯量が少ないのでは多くの方に清潔に利用いただくことが出来ません。絶対的な湯量は、多いほど良いのです。さらに配湯コストが低く抑えられていないとその湯量も意味のない物となります。湯原温泉郷の場合、湯原温泉、足温泉、下湯原温泉は、行政による従量制の管理配湯で利用施設と協議され適正な価格が維持されています（平成16年現在、温泉1ト、150円 / 水道1ト、170円）。真賀温泉及びその他の地区では住民区の温泉である為、維持に必要なコスト負担しないシステムです。

入浴者1名あたりに利用出来る湯量

温泉全体の湯量 **噴出量5800ト / 毎分** 年間 **305万ト**

305万ト ÷ 20万人(年間入湯税対象人数) = 約15ト

305万ト ÷ 70万人(年間入客数) = 約4ト

1ト = 1000リットルなので、約4000リットル

一般家庭の浴槽の水の量は約300リットルなので

入浴者1名あたりに
使える湯量は

家庭のお風呂

約**13**杯分となります。

補足：廃湯コストと環境問題

温泉利用施設に掛かる配湯コストには、実は廃湯の為のコストも加算して考えなければなりません。幸い？湯原温泉郷には下水道施設がなく浴槽のお湯は、そのまま川に流されています。従って廃湯コストは現状「0=ゼロ」なのです。しかし今後、下水道が整備された場合の処置や環境問題などを考慮する必要があります。

湯原温泉郷の温泉は、アルカリが強く洗浄力の強い温泉です。その事を利用者に理解頂くことで不必要な洗剤の使用を押さえる事が出来ます。また塩素などの利用も浴槽の小型化などで使用しないで済みます。元来、湯原温泉郷の温泉は、自然に湧き出て川に流れていた温泉です。利用方法を誤らなければ自然に優しい湯場であり続けることが出来るのです。環境問題に配慮することも温泉指南役の活動なのです。

湯原温泉郷の泉質

温泉分析書による表示では「アルカリ単純泉(低張性アルカリ高温泉)」という表示がされています。温泉指南役では、湯原温泉の特徴をご理解いただく為、「低張性アルカリ高温泉」という呼び方をあえて採ります。

泉質：低張性アルカリ高温泉

低張性とは、皮膚にしみ込みやすい性質をもっているということです。その為、入浴時には短時間で皮膚がふやけた感じになってきます。角質化した皮膚が剥がれやすい状態を作るわけです。pH値は、9以上と強いアルカリ性の温泉です。温泉そのものが



「天然アルカリイオン水」なのです。アルカリ性の温泉は、洗浄力があり油分や角質化した皮膚を乳化させて溶かす作用があります。入浴時にツルツルした感触があるのはその為です。この作用がアトピー性皮膚炎の脱ステロイド療法として効果があるようです。さらにアルカリ性の温泉には身体を温める作用があります。アルカリイオン水でお米を炊くと美味しくふっくら炊けると言いますが人間の身体も良く温まるのです。これが血行やリンパ液の流れを良くし、痛みや凝りをほぐし疲労成分を取り除く助けになるのです。

適応症と禁忌症は【温泉指南役おすすめ入浴法 適応症と禁忌症についてP11】に掲載しています。